
僕に雨と魂はついて回る

峰 理子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕に雨と魂はついて回る

【ZPDF】

Z6537X

【作者名】

峰 理子

【あらすじ】

「兄さん、私と死んでください」

そう彼女から告げられる。

なぜか?と聞え

「今死ないとあとで死ぬからです」

もはや人間には理解不能?

走馬灯と魂が一緒になってしまい

雨の日は魂がいれ変わっちゃう

ドタバタ学園コメディー

1話 僕は嘘ですかれてる？

朝

雨で蒸しつとしてた

暑くて寝苦しくて

汗すらかいてかいていた

何でだろうか

彼女の夢を見た

その日はいつも雨だ

彼女のせいかもしれない
実際。雨が好きだ

彼女の夢が僕を

いつも正しい方向に導いてくれる。

何か迷いがあると

必ず夢に出てきて

なぜか起きると

すつきり

新しい朝を迎えている

最初あつた時は

正直

こいつは余つてはいけないやつだ
と思った

正直。

でも
今は大好き。
そう言えたらよかつたかな…

あの日も雨だった
水が地面につく音でいっぱいだった

すべてが反響して

部屋のなかは雨の音だらけ

そんな音も忘れるくらい

彼女

に見惚れていた

腰まである長い髪

前髪はパツツン

バツサリなご様子

服は…

きていない…

その事に気づいて目をそらす。

僕もやはり女の子の裸は直視できない。

そんな勇気は持っていなかつた。

彼女は床に這うように

僕にちがづいてくる

ゆっくりと

極力、直視しないようにしたのがあだとなつた
彼女は僕の頭を持つて自分に向かた。

純白の白い肌

膨らみかけた胸

すべてが僕の目の虹彩に移る

僕は顔を真っ赤にするが

彼女は手を離さない

頭から片手だけ頬に手をおき

「兄さん。私と死んでください。」

この時点で2つ考えている

まず僕の家族だ

僕は兄弟は姉しかいない

しかも現在海外にいる

両親も仲良く海外だ。

つまりは妹に当たる存在はいない。

兄さんは絶対に言われない。

そして2つめ

なぜ死ななければならぬ

家に帰つて昼寝して

起きたらこんな美少女に

死んでください？

ふざけるな

まだまだ生きたい。

漫画家の夢も諦めない。

そう考えて

僕は重い口を開ける

「何故死ななければならぬ？」

「いま死ななければこのあと死ぬからです。」

彼女はそう答える

1話 僕は歴史が書かれてる? (後書き)

「観覧ありがとうございます。」

この先も見てくれるといれしいです
感想や評価どんどん送ってください

その感想を元に

次話に取り組みたいと思います。

2話 僕に走馬灯はついてくる

「どうゆうひとだよ

いま死ななきや

このあと死ぬ？

「すみません人間の知能には無理ですね。」

「はあ？」

「死ぬと言えど

一時的に死ぬだけです。

じやないと殺されます。」なるほど…

つて無理！

どうやつて蘇るのや…。

そう顔で訴える

正確には

しかめつ面だ

「私の魂と一時的に融合します。その後分解して元どうつ」

「こいつはあつてはならないやつだ。

そう思つた。

「元どうつたつて」

彼女は片手だけだつた

頬にわらに片手を当てる

「任せてください。必ず生きてもらこますから…。」

…

いやこやいや

生きてもらこますから

つて

てかどうしてこんなことになるんだ。

俺は彼女と出会いつまでを思い出す。

もしかしたら過去に何かしたかも……うん

朝起きて

傘をさして家を出た。

雨だったから

高校生の俺は

家が近い友達と一緒に

学校に行つた。

授業を受けて下校

家に帰つて

お菓子を食べて

昼寝した。

何か悪いことをしたのだろうか？

目をさましたら

目の前に裸の女の子。

Why?

しかも呼び名は兄さん

Why?

「とりあえず私の体に入つて魂を融合せらるんです。兄さん。」
考え込んでいて話をかけられたちょっと驚きつつ彼女の体を見ない
ようにして言う。

「なんで兄さんなんだよ。」

「その方が喜ぶかと思って。嫌でしたか？」

「……」

言葉がつまる

俺は妹萌えでわなないが
悪い気はしない

「難だつたら。お兄ちゃん、おにい、バカ兄貴、クソ野郎とバリエーションがあります」

「名前でいいから名前名前最後とかヤバイじゃんけなしてんじゃん……」

「そう思えば私はあなたの名前を知りません。」

彼女は頬にあつた手を
相づちのなるほど的な
仕草に使う

つまりは解放された訳だ
そのすきに後ろを向く。

「クソ野郎。名前を教えてください」

「何でクソ野郎なの！？ 猛だから 笹塚 猛。」

「わかりましたクソ野郎」「変わんないの！？」

「冗談です」

そこでふと思う

この子は名前なんて言つだらう

「名前ですか？」

「テレパシー！？」

「いいえ。勘ですよ」

「凄いな……」

感心してる間に話を始めた彼女。

「名前ですか。 じいて言えば走馬灯です。」

「あの死ぬ前のヤツ？」

「はい。ちなみに死が姉に当たります。」

「……はい？」

「死にも気持ちが存在するんです。ですが死 자체なので死をする事しかできません。私は走馬灯つまりはあなたの死を知らせる役割な訳です」

「助けてんじやん」

純粋にそうおもう

「今日は特別です。あなたが特別だから。」
後ろを向いていた俺に抱きつく走馬灯
なにか後ろに柔らかい感触がつて…

があああああ

考えるな考えるな考えるな考えるな体で感じじろ

：駄目ー

考えるな考えるな

つて

「無理だあー」

「どうかしましたか？」

「何をしている離れる」

「抱きついています。嫌です。」

「なんだよお前は」

「走馬灯です」

「あーもうあーいえばこーゆう」

「正確にはあなたと思い出を作つてます。」

急に真面目な話しになつて少し驚く。

「思い出？」

「魂をつなぐための接着剤代わりのものです。思い出を共有していればそれほど魂と魂の接点が出来ますから。」

「何となくはわかつた。」「あとは魂を融合するだけです。」

「つてもなあ」

女の子の魂と融合つて

違和感抜群だる…

「嫌ですか？」

抱きつきながら耳元で囁つ言葉じやないだろ。

なんなんだよもー

2話 僕に走馬灯はついてくる（後書き）

ご観覧ありがとうございます
どんどん感想 評価
送ってください！
お願いします！

3話 走馬灯は僕を誘惑する

嫌だ！断じて嫌だ。」

俺はキツチンまで歩く。

「まだ猛はましです」

「どこがだよ！…」

「私は人間の形をしていますが……私たち現象は形が決まってません。つまりは酸素や窒素だった確率もあり、はたまた虫や多足類生物の可能性だつてあります。」

「……」

言葉を失う

もし

虫に死んでください

つて言われたら…

考えだけで悪寒がする

「確かにましなのはわかつた。だが幸運にも形が人間なんだ、しかも女の」

はあ…

と彼女はため息をつく

「人間はどこまで貪欲なんですか？わかりました。あなたの体をベスに魂を融合しましょう。魂の形態が変われば必ずと運命もかわるものですね。」

「そうゆうものか…」

「そうゆうものです」

まあ…俺はまだ死にたくないしな…「わかつたおれも男だ死にたくないからな

「良く言いました！」

だか気がついた

最初に彼女は

「私と死んでください」と言ったその後訂正した。
うむ…

「なあ最初死んでくださいって言わなかつたか?」「
「はい。ですかもう違います私が死んであなたと融合します。死な
ないと体と魂は離れませんので」

「ん…そうか」

「俺は自分がかわいいから
何も干渉しないぞ!」

「そんな女の子を殺せ無いよ!」

「なんて言わないぞ!」

「自分がかわいいからな!!」

「私の死体どうします?」「ちなみに聞くが俺は死んだ後どうする
つもりだつた?」

「放置しますと言つよつよく原形を止められるように一酸化炭素中
毒などにしますからどうも出来ません。ちなみに。姉に話を着けて
ますから死ぬ瞬間に私の魂はと融合しますからダメージ〇です」

「つそうか」

「でわ死んできます」

「いやいやいや話まとまつてないし」

「何ですか。まずいです時間がないんです」

走馬灯の少し怒った声が響く

「すみません。少し気が立つてました」

「いや良いんだ俺は助けてもらつ方だからな…」

「わかつてもらえて幸いです。でわ死んできます」

「よくわからんがわかつた。だがな…」

「俺はタンスまで歩き

短パンとTシャツをなげわたす

「裸で俺の部屋を出るのは困る」

「わかりました」

そう言って

彼女は服をきているであろう音をだす。

「これでいいですか?」

ここで初めて自発的に彼女を見る

「ぬはああ」

ヤバい

逆にヤバい

サイズが会わなさすぎて

ヤバいで

逆にエロい

理性を保つようにしながら囁つ

「傘は玄関にあるからな…」

「わかりました」

しばしの沈黙のあと

「でわのちほど」

ぎい:

バタン

戸が閉まる

ふう:

と一息つく

だが…一息つく暇なんて俺にはなかつた

4話 走馬灯は僕に融合^{マサニ}する

ダン！…ダン！…「ンシン！…

嫌な音だ…

二階だからどうせ一階だろ…

…一階？

二階

二階

階段…？

嫌な予感がする。

気になつて戸を開けてみると血まみれの彼女

走馬灯。

「おいつ…！」

そう言つた瞬間だった

ドクンシ！…

何かが流れ混んでる気がする
何かに乗つ取られる感覚がする

ドクンシッシッシッ

何かがくつついた気がする

スワア…

気がつくと

元どり

階段の奥に血まみれの彼女
ゲームなれてはいたが
やはり本物はグロいな

（死体ですから）

「つ！誰だつ！つてか走馬灯か…」

（はい走馬灯です）

「何でここで死ぬんだよ」（雨で床がよく滑りました。靴も履いて
無いので）

「わかつた。俺が悪かつたとりあえず死体…どうする？」

（帰る時に体いるので。密封か冷凍もしくは真空がいいです。）

「あるかつ！そんなもん」

うん…？

帰る？ そつか帰るのか。

…何処に？

しかも姉が死？

じゃあ親だれ？

つてか…

あいつは誰だ…？

（走馬灯です）

「知つとるわつ！」

「てか考えてる事もわかるんだ…」

（あまり前です。魂が一緒ですか…）

なんだか気分が悪い

耳じゃなくて頭に声が聞こえるような…

物凄く違和感ありありだ

（そうゆう時は寝たら治りますよ。）

「寝れるか！死体もあのまんまだし。」
(とりあえず家にいれましょう)

「んじゃないれないと」

そう言つて今まで気にしてなかつた

死体を見ようとする

そこには

血痕

血痕しかない。

死体がないのだ

「おいつ！走馬灯…死体ないぞ…」

(見えてます。視界も同じですか…)

「これはお前がやつたのか…？」

(私ではありません。おそらくですが私の関係者かと…一人。いや…正確には一種族でしょうか？心当たりがあります)

「大丈夫なのか？そいつら…」

(死です。)

「はあ？」

もうよくわからん

(私の目的は魂を融合させ寿命を伸ばすことです)

「寿命？助けたんじゃないのか？」

(はい。しかし正確には本来あなたは死んでます。寿命来てますので。)

「……」

黙る

今は物事を理解せねば

物事…でわないかもしかんが

（そこで寿命がくるはずの魂が無くなりましたので。正確には融合ですが、死が通りすぎたあと、次に私たちの魂の寿命が決められます。だとすると体が1つ多いですよね？ですから人の目につかぬうちに何らかの形で何らかしたんでしょう）

何らかが多いな。走馬灯にはわからないってことだろ

俺は走馬灯の体が消えた理由よりも

さつき言った

一種族

という言葉が気になる

死が一種族なら

その妹の走馬灯も死じやないか？

つまりは走馬灯も種族が死になるんじやないか？

（いえ。走馬灯も種族です。しかしあなたは頭の回転が早くて助かります。）

「聞いてたんかいっ」

（別に聞きたくて聞いてるわけでわなく勝手に聞こえますので…嫌なら努力はましますが…）

「いや…責めてないんだ」（はい。助かります。話を戻しますが。ですから私は走馬灯という種族にぞくすることになります）

「人間の何々さんのように走馬灯の何々さんって感じか？」
(そうなりますね)

「そつか……へつ…クシユ」

寒つ

思えば

血痕の前で

雨にあたりながら

話してたから

冷えたな…

起きてる事が凄すぎて神経が死んできたな…

(一回部屋に戻りましょう。)

「んだな…へっくシユ」

部屋に入つて

水がある程度絞つて

干したあとに

シャワーに入ろうとした

(猛: お願いがあります。)

「ん? なんだ? 珍しいなお前から願いなんて。……へっくシユ」

(シャワーに入るなら目を瞑つてくれませんか?)

「なんでそんなつ…」

いや

待てよ

視覚も一緒何だろ…

(だから…お願いします)

「極力…努力する。」

そう言って

シャワーにはいる

さすがにきついな…

目を瞑りながらなんて

無理だ…

一瞬目を薄く開ける

蛇口の位置を確認してすぐ閉じる

(猛う～)

今まで出したことのない
可愛い声…
こんな声も出るんだ
と思つ

(猛う～……う?)

「違うわっ！」

なぜだか疑惑もかけられたがシャワーをあがる

「なあ走馬灯…」

(はい。)

「寝るのか？」

魂は

睡魔が来るのだろうか？

神経が同じだから

睡魔もくるのか？

(わかりません。こんなことめったに無いので)

「無いの？」

(最初に言いましたよね、あなたは特別だと)

「なんで特別何だ？」

(すみません。今は言えないんです。時期が来たら教えます)

「あと一つ。特別じゃないなら走馬灯は来ないのか？」

（いえ。走馬灯は来ますよ。走馬灯はいわばチャンスです。空気の走馬灯なら時間がゆっくり感じます。正確には空気抵抗でゆっくりにしただけですが。空気の走馬灯はお節介なので。）

「お節介な走馬灯もるんだ。」

俺はベットに座りつつ言つ

（人間の形の走馬灯は特別です。相当な事がないかぎり動きません）

「走馬灯も面白いな」

人間みたい。

人間？

人間なら名前があるんじや？

走馬灯なら…

（あります。例えば空気でも名前があります）

「酸素とか？」

（違いますね。走馬灯は世界にある元のものに化けますから。）

「エアー？」

（馬鹿か頭がいいのかどうか私はわかりません。）

…自重しよう

ただツツ「ミミ」がほしかったのに

でも

それならあいつにも名前が…

（ティナ…ティナと言います。）

「ティナ…か」

（変…ですか？）

ヤバい

物凄く甘い声を出された

声だけなのに可愛い。

(猛…走馬灯とは付き合へませんよ~.)

「体無いしな~」

「…」

そう言って

俺は寝に入る

思い返せば

物凄く疲れた

昼寝して夜起きて

裸の少女。走馬灯ティナ

まさかの階段から落ちて死んで。魂くつついで俺は寿命が伸びて
いつ元どおりになるかも
どうしてこんなことになったかもわかんないけど

死ななくてすんだから…

この先は明日の俺に任せること

あと、嫌なことが起きないように祈りながら。

4話 走馬灯は僕に融合する（後書き）

大分時間が空きましたね・・

4話まできました

なぜ姉が死なのか

親は誰なのかといった疑問は

大分あとになるかとおもわれます

引き続きコメントや評価もよろしくお願いします

5話 僕は日常生活をする

「そんなに楽しみか?」

(はい、行ったことがなかつたので楽しみです。)

走馬灯のティナと魂が合体した
次の日。

学校行かなければならぬので
ティナに話したところ

こうなつた訳だが。

「走馬灯に学校はないのか?」

玄関で靴を履きつつ訪ねる

(学校とは違いますが。似たような制度があります)
「似たような制度?」

靴を履き終えて

ドアを開ける

そして 学校まで 歩く。

俺が行つている高校は

歩いて 二十分钟左右の学校で 每日 徒歩で通つている。

(義務ではないのですが。それぞれの走馬灯に合つた講習を開いて
います)

「へえ～走馬灯も勉強するのか。」

感心しながら

道を歩く。

(はい、義務でわ無くとも、試験に合格しなければ人間と会えません。)

「受験みたいなもんか?」

(そうなりますね。)

そつか。勉強してまでこっちに来るのか。
何でだ?

(それは人間に何故生きるのかと問うのと同じですよ?)

「考えてる事を読まないでくれ!!」

「この声がわかるティナは考えてる事がお見通しだからな…思わず叫んでしまった

(好きで聞いてる訳じゃないんですよ…不可抗力です。)

「まあ良いけど…」

ふと 視線に気がつく。

見れば 回りの 人たちが哀れみの目で見てくる。

俺はきずいてしまった

他人から見れば

何か一人でぶつぶつ言つてる人…

そひこ いきなり

考へてる事を読まないでくれ…！

と叫んでいる。

これじゃ 頭がいつてる人じゃないか！

「ティナ…俺は家に着くまで話せなくなつそうだ…」「すみません…猛。私も気を付けます。」

恥ずかしくなつて
早足で学校に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537x/>

僕に雨と魂はついて回る

2011年11月23日20時57分発行